

人文学部卒業研究

題目 ドキュメンタリー番組が構築するステレオタイプ
～東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件を事例にして～

指導教授 柳谷 啓子

印

提出年月日 2018年 12月 17日

学籍番号 HI15024

氏名 近藤悠也

ドキュメンタリー番組が構築するステレオタイプ
～東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件を事例にして～
HI15024 近藤悠也

要旨

本研究では、刑事事件を扱うドキュメンタリー番組が、どのような切り口や描き方で犯罪者のステレオタイプを構築していくのかを、1989年に宮崎勤がひき起こした東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件の事例を題材として研究を行った。そこから視聴者に発信されている相変わらず偏った／誤った固定観念を刷り込み続けるマスメディアの問題点を改めて提示した。

偏見といっても「黒人⇒怖い」、「中国人⇒せっかち」など、実際に被害を受けていないにもかかわらず勝手に決めつけてしまう人々が多くいる。本研究の中心的分析対象となる「ロリコン⇒オタク」という偏見は、上記の事件について報道されてから人々が同様の趣味を持つ人々に対して、抱くようになってしまった。同事件から30年経った2017年、フジテレビが『衝撃スクープ SP-30年目の真実、宮崎勤の肉声：東京・埼玉連続幼女誘拐殺人犯』というドキュメンタリー番組を放送した。この番組でも「オタク⇒ロリコン」という偏見は払拭されていなかった。30年たっても偏見がなくなることはないことは、なにか製作者に意図があるのではないかと考え研究対象とした。また当時の新聞記事についても偏った考えが多く研究対象とした。

分析する新聞記事は、朝日新聞、読売新聞の朝刊、夕刊を分析対象とした。分析方法としては事件が発覚し、見出しとして取り上げられた期間と考えられる1989年8月～1990年3月の記事に見られた見出し、フォント、ロリコン⇒オタクなどの偏見的要素が強い文面を分析した。

ドキュメンタリー番組では、犯人の性格、生い立ち、生活環境、趣味嗜好が犯罪生起に影響を与えたとして描いている部分に焦点を当て、いかにして視聴者に対して印象操作をしているか分析した。

ドキュメンタリー番組での分析結果は、冒頭部分で事件当初マスコミによって公開された大量の漫画、ビデオの写真を写し偏見報道は、未だに残っていた。宮崎と警察官の取り調べのシーンでは、警察官の音声が入り替わっていた。警察官の威圧的な取り調べとは違い、冷静で落ち着いた人物を俳優に演技させた。対して宮崎は声を荒げるシーンがあり視聴者から見ると冷静な状態ではなく異常者に映ってしまったと言える。番組では宮崎の生い立ちも紹介されており、幼いころから抱えていた障害や父親の育て方に問題があり、結果子供のような感情が残ってしまった。この番組自体が印象操作につながる点では、取り調べの警察の音声が入り替わることによって番組側が自由に宮崎の印象を変えることができた点である。そして宮崎の生い立ちを詳しく視聴者に説明することで宮崎という人物が如何に異常者であったか伝える意図があった。

朝日新聞、読売新聞2社の分析結果として、どちらの新聞社も似たような記事はなく、それぞれ別の視点から書かれていた。朝日新聞では、犯人の動機はあまり記事にせず、事件のあとに社会的にどのような影響を与えたかという内容が目立った。読売新聞では、犯人の生い立ち、犯行の動機など、事件の内面を書いた記事が多くあり、事件についてより詳しく書かれている印象であった。

2つの分析結果をもとに、マスメディアが人々にどのようにしてステレオタイプを刷り込んでいくのかを明らかにした。当時公開されなかった音声テープの公開、専門家を用いた事件の分析、現代も社会的に問題になっている引きこもり問題を宮崎の趣味と関連させた。そうすることによって偏見のあるステレオタイプを刷り込みより説得力のある記事にしていた。いかに人々が食いつきやすいワードを用い、社会と実際起きてしまった事件を上手く関連させる事自体がマスメディアが人々にステレオタイプを刷り込む手口だと判明した。

この研究により偏見をなくす世の中にするためにも、ステレオタイプを構築するマスメディアが世間に与える影響の手口を本研究で知ってもらい、洗脳されないようにする必要がある。本研究は、そうした対策への一助とした。

キーワード

ステレオタイプ 宮崎勤 偏見 マスメディア オタク ロリコン 犯罪者

目次

1. 研究目的	1
1.1 研究の必要性	1
2. 本論文で重要となること	1
2.1 東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件報道について	1
2.2 ステレオタイプの構築されるまで	2
2.3 現代のマスメディアに対する問題点	3
3. 先行研究の検討	4
3.1 島崎哲彦・辻泉・川上孝之（2004）の検討	4
3.2 田野大輔（1999）の検討	4
3.3 細川秀雄（2002）の検討	5
3.4 本間 龍（2016）の検討	6
3.5 牧原智和（2006）の検討	6
3.6 森 達也（2005）の検討	7
4. 研究方法	8
4.1 ドキュメンタリー番組分析	8
4.2 新聞分析	8
5. 各データの分析	9
5.1 ドキュメンタリー番組	9
5.2 新聞分析	10
5.2.1 朝日新聞	10
5.2.2 読売新聞	19
6. 新聞社2社の比較	29
7. 終論	31
参考文献・参考WEBページ	32